

## ● 水路交差点

もう一人の自分

影山敬之

木村小夜さん「洞穴から吠える」

共有できる気になる問いがいくつかあります。そのうちの〈作問と採点の関係〉と〈文学教育〉に焦点を当て私の思うところを書いてみます。私は教育の場に携わったことがなく、センター試験の複雑なあり方も知らないのですが、あくまで外から眺める立場から書かせてもらいます。

木村さんがこれを書かれた理由は、文科省が「大学入試によって高校教育を変える、という手段を練り出してきた」ので、「検討のための委員会が学内に立ち上げられた」ということがあったからです。「入試の大幅な改変事項はセンター入試の後継である共通テストへの英語の民間試験の導入と国語・数学の記述式問題の採用だっ

た」そうです。ここには文科省が特定の民間業者の利益に付度し、真剣に勉強して公正な採点を望む高校生をないがしろにする態度があります。高校生を犠牲者にするこの「無謀」で「自明な愚策」を座礁させるために木村さんは学内で運動し、その流れのゆきつく先は、国会で発言するということでした。「実社会で用いられる契約書や諸規程が読めることの方が大事だという」文科省の方針に木村さんは「文学的文章の存在を否定したい」という動機を読みます。内面の声の居場所がわかるようなトーンで描かれ、責任感と人情味とユーモラスな雰囲気を感じさせる奮闘記になっています。

役に立つ契約書や諸規程の読み方に重点をおこうとする改革方針に、文学的文章を死守する立場は、批判精神が大学入試改革の杜撰さを追求することに留まってはいません。この文章自体が工夫を凝らした文学的な表現になっっていることよって、無味乾燥な契約書や諸規程を重視する文科省の方針に対する鮮度の高い異議申し立てになっていきます。ご自身が闘争の渦中で状況に振り回される姿をその感情の動きとして多様な語彙で描写なさっています。全部がそのままではないですが、並べるとこんな感じになります。嘆息・脱力・恐怖・啞然・歯がゆ

さ・呆気・うんざり・面倒・安心・落胆・困惑などです。あたかも視界の中に流れる雲の形が変わるように感情を表現する語彙が様相を変えてゆきます。おそらく同じ語彙は前半だけに限定すると使われていないのかもしれない。注意しないと気づかないようなこの微細な表現の変化を使いこなす技に感嘆しました。そしてこの微妙さがそのまま文科省の謀略？への批判となっているのだと思います。よくこれだけ感情・気持ちの流れをルポルタージュ的文章に織り込めたものだ、という驚きがあります。

拝読しながら思い出したのは、ある美術評論家が大学入試に自分の書いた文章が出題されたので自分で解いてみたということが書いてあった文章です。五問中三問が正解だったそうです。冷静でニュートラルな思考がそこにはありました。自分が書いたものが自分から離れて人の手に渡った感覚と、それでもそれは自分で書いたものであるゆえの読解をしている姿がそこにはありました。うる覚えなので正確なことを言うことができないのが残念ですが、書いた本人が正答をだせない作問というのはどうということだろうという疑問と、それはよくあり得る

ことだという観点が揺れ動いたままその文章のことは忘れてしまっていました。

今、それを受けて答えるとしたら、こう答えることになりません。

こういうことが起こりえるのは、言語自体が書き手の言いたいこと以上のことを言ったり、言おうとしていないことを言ったりするからです。言語の性質からして、書き手はどう適切に自分の言いたいことを言うために慎重に言葉を選んだとしても、自分の言いたい枠にその言葉収めることはできません。

このことを思い出したのはこう書かれていたからです。今回のセンター入試から共通テストへの改革では、「実質的な採点基準を問題作成側ではない業者が決めることになる。採点基準は作問の趣旨を理解した作問委員が作成し、採点と作問は一体化していなければならない、というのには、入試の常識だった」。

私が思い出した例では、作者がいて作問者がいました。この二者にとつて、同じ問いへの答えがすべての問いで一致するわけでもありませんでした。つまり、書いた本人が満点を取ることが難しい。作問者と採点者がいる。この間にも同様にズレが不可避的にでてくる。今回の改

革テストである共通テストの採点基準は作問者でない採点者が決めることになっています。作問者と採点者は同一であるという入試の常識を覆そうとしているということです。

さらに問いのありかたに言及されているので引用しなす。

答え方についての指示文がこれだけ長いと、受験生は文章の内容そのものでなく指示文の意味の読み取りに気を取られる。条件が多ければ多いほど答え方が狭まるように思えるが、実は条件の言葉が多くなれば、問題文の解釈の幅はそれだけ広がるのである。だから、問いかけ文はシンプルであればあるほどよい、というのが作問の常識だろう。こうした記述式問題は成績上位者には簡単に解けるだろう、と座談会で発言する専門家もいたが、私はそうは思わなかった。むしろ、熟考する受験生ほど時間をかけすぎて正答から遠ざかる、学力を適切に測れない悪問である。

この条件つき問いという言語形式への指摘は、慧眼がすこぶる発揮されているところだと思います。

作問者がひとつの問いを立てる。そこへ長い指示文が加わり、条件が増える場合どうなるのか？ この場合ひとつの問いが、ふたつの異なった意味を生じさせることが当然ありえます。「熟考する受験生ほど時間をかけて正答から遠ざかる」のは、作問者が思い描いた問いはAであり、それを解答者である受験生がAでなく、Bか、はたまたCというほかの質問内容と解釈する可能性があるからです。作問者が問いを複数の条件によって一義的に狭めたと思ったとき、実際には質問の可能性が複数化しているわけです。作問者は自分がだした問いの意味を十分わかっていない可能性がつけねにあります。自分が立てた問いの多義性が読めていないということが十分あり得るのです。作問者と採点者が異なる場合どうなるか？ 作問者がAという問いだと思つていても、採点者がAでなく、BやCという問いだと考える可能性は避けられません。この場合、ここに採点者・受験者関係が加わり、ズレが二重化されてしまう可能性がでてきます。伝達の精度は媒介者が少ない方が高いので、これから文科省がやろうとしている大学入試試験は、いかに受験生を軽んじているのかがわかります。

また、木村さんが実験段階での試験を読み解いた結果、

こういう事態が起こったと述べられています。

さらに、受験生は自分の各解答が四段階評価のいずれに該当するか、正答例と正答の条件を参考に自己採点しなければなりません。今までのマークシート問題では容易なことだったが、当然ながら記述式問題の解答は、たとえ正答であっても百人いれば百通りの書き方が出てくる。私は自分の解答がaなのかcなのか判断がつかず、そのブレは全体の五段階評価のAかCかのずれにまで及んだ。

ここでは、記述式のほかの大きな問題が指摘されています。作問者はどれが正しいのかという例とその正答の条件を与えるが、受験者が自己採点の段階で、自分の解答がどれに相当するのか、その分類に当てはめることが自体が困難である、と。実際の採点者もこのブレの中で判断するので、公正さは期待できません。その上アルバイトが採点基準の作成に関わるのです。

記述式の採点ということが、私たちが想像するような範囲を超えて複雑な様相を呈することがわかってきます。暗記物のマークシート方式より記述式の方が考える力を

養えるのでよい、ということを表面的にしか理解していない場合の陥穽がみえてきます。ここが一般の人にはみえていないことで、とても大事な点だと思えます。これが公正に採点するということがどういふことなのか、という問いをもっていない人たちが企てた無謀な改革を木村さんが受け入れることができない理由です。これをやってしまったと教育が破壊されてしまうということが押読してよくわかりました。これを阻止できたのは木村さんたちの尽力のおかげです。二〇二一年に初めての共通テストが行われますが、そこには記述式問題はありませんでした。ただし、実用的な文章は出題されました。

次に「文学教育」の意義についてです。

「若い時に良質の文章を読む習慣を身につけることは、大事である。そして、この習慣の是非や読まれるべき文章の性格は社会的な実用性・即効性といった基準で判断されるべきではない」。その通りだと思えます。いくつか文学教育が必要である理由はあると思いますが、私の考えていることだけを述べます。そのために「実用性」への視点を変更します。

文学教育の存在意義は現実には頻繁に活用されていま

す。その成果はあるのです。つまり、役に立っています。重要なのは、この役に立つという言い方が、この現実生活の側の実用性だけに回収されないように語ることなのだと思えます。役に立つものと役に立たないものという通俗二項対立の構図の罨にはまらないことです。この土俵にのつた時点で論戦は敗北する可能性が高くなります。それは、実用性の方がより価値が高いと相手が確信しているようにみえるからです。

情性化したこの私たちのところを文学・音楽・映画・アニメ・テレビドラマなどの芸術は賦活してくれます。現実とは異なるもうひとつの世界を提供することで、自分でないもうひとつの自分、自分では経験できないもうひとつの世界に忍び込むことで、現実に生きる私たちは再生されます。この往還の繰り返しの通路をあけてくれるのが文学教育です。通路はそのままでは開かれていません。それは学ぶことで初めて自分で開き体験できるもうひとつの自分の世界です。学ぶほどその通路は広がり多方向へ向かいます。再生能力は魅力を増し高まります。すべての小説はそれを読む私たち一人ひとりのために書かれています。それは読んだ人と作品が切り結ぶ関

係は唯一無二の関係だからです。ひとつの小説はそれを読む私たち一人ひとりに語りかけてきます。それを聴くための技術と方法と力は養われないと身につかないものです。

文科省が推進しようとしている「規約や取扱説明書」「契約書や諸規定」の読解力を身につけることは、この日常という現実自体に属します。だから現実生活の役に立ちますが、現実生活に疲弊・枯渇・憔悴した心身を再生するための役には立ちません。高校教育改革の名のもとに、現実に役立つ文章を重点的に読ませる精神が貧困なのは、このことによつて日常生活での精神が貧困になることに無自覚だからです。新陳代謝できない精神は、現実を硬直化しその活力を失います。「とりわけ文学的文章の存在を否定したのである」と。また、「自分の砂地は水を求めるように小説を欲している。このままで自分の根っこが枯れる。それほど、彼らの教育方法は、生徒に読ませようとする文章への愛着、読むという行為の尊重が感じられなかった」。

たえず私たちの精神は現実の重みに枯れる運命にあります。木村さんはそのことに特別に鋭敏な感性をもっているのだと思います。その枯れた精神を再生するために

この現実の自分とは異なるもうひとりの自分を私たちは小説に求めるのです。テレビドラマやアニメや映画や音楽にも、人が癒やされると感じているのなら、そこには、たえず、自分でない自分がいるはずです。祭りの非日常は、日常のこの自分でないもうひとりの自分を見出す場です。この非日常性の支えを若いときに与えるのが文学教育なのです。私たちは日本語をいつの間にか習得しているのです、そのことを見過ごしがちです。非日常へ移動するためのツールが文学教育です。そこへ移動するためのヴェイクルの運転をいくつか覚えるのです。それは型と違ってよいものです。これによって日常と非日常の往還の繰り返しを覚え、この現実を過こしやすくなるのです。生きているのだと思います。現実はこのことによって豊かになるのです。生きることに意味はあるのか？ という、生きていく私たちにとって切実な問いが文学教育にはあります。小説や詩は顕在・潜在的な形でこの問いの周囲を回っています。逆説的ですが、この問いを打ち消すために、文学や芸術は創造されます。それが私たちを蘇生させるのです。私はそう思っています。

最後に、木村さんの気持ちを集約的に代弁してくれて

いるある人の発言を引用します。

翌日、ネット上で流されている昨日の羽藤さんの衆院での陳述の録画を見る。天敵ベネッセの担当者を背後に、「営利追及と公正な入試は両立しないのです」と吠えていた。

「財や名を成した素人がどこか高いところに集まって個人的な経験や感想を言い合い、その中で決めた現実味のない教育政策が、推進に無批判に協力する形でそのまま現場に降りてくる。この状況こそどうぞ改善して下さい」

ここに訴えかける名言です。とつても文学していませんね。